

一は、自分よりも見知らぬ患者の事を考えていることに心を打たれ、もっと他に何か自分の好きな子供に関わる仕事ができたらと思いはじめた。そして今回、HPSの養成講座を受けることができ、まだHPSは日本では知られた資格ではないが、入院・通院治療が必要な子供と家族には不可欠な仕事だと思う。将来、たくさんの病院で理解され導入されることを切に願う。

10. 子供を亡くした母親たちのボランティア活動

坪田起久恵

(がんの子供を守る会 福井支部代表幹事)

私どもががんの子供を守る会福井支部では設立当初より小児がんで子供を亡くした家族の交流会を開催してきた。何回か続けるうちに、毎回参加される方が何人か決まった。友情のような仲間意識が生まれた。子供を亡くした親は、最初はその喪失感を癒し、同じ苦しみ悲しみを分かち合いたい。人によって時間差はあるが、何年かたつと前を向けるのだ。子供を亡くした意味を今後の人生の糧にできるのだ。そのうちメンバーは茶話会だけでなく、今闘っている小児がんの子どもたちのために何かボランティアをしたいという気持ちがわいてきた。院内学級のバザーに自分たちの手作り品を提供しようということになった。まだ病院へ行って直接闘病中の子どもたちと触れ合うことはできないが、今後も、少しずついろんな活動をしていきたい。心が前向きになった母親のメンバーを増やして、地道に活動していきたい。

11. 小児がん経験者とその家族を対象としたサマーキャンプの効果と課題

栗原 康輔, 小早川雄介, 坪谷 尚季
(三重大学医学部医学科)

世古口さやか, 出口 隆生, 堀 浩樹
駒田 美弘

(三重大学医学部附属病院 小児科)

三重大学医学部附属病院小児科血液腫瘍外来での長期フォローアップの一環として昨年に引き続き、本年8月に小児がんキャンプ(1泊2日)を実施した。キャンプの企画・運営は、医療系を中

心とする学生ボランティアが、チャイルドライフスペシャリスト、医師の助言を受けて行った。対象者は、小児科血液腫瘍外来に通院中の小児がん経験者とその家族(きょうだいも含む)で、小児がん経験者19名、その家族27名(親18名、きょうだい9名)、学生ボランティア30名(医学系19名、看護系9名、その他2名)、小児科スタッフ12名、一般ボランティア4名の合計92名が参加した。キャンプでは、レクリエーション、交流会、キャンプファイヤー、野外調理などの活動を行い、患児・家族との交流を行った。キャンプ終了後に実施した患児・親へのアンケートより、キャンプ参加前後の気持ちの変化、今抱えている悩みや心配に対するサポート効果、病気に対する理解などの教育的支援に対する今後の課題などについて報告した。

12. 小児がん患者への病名告知に対する一般の意識 —小児と成人の比較—

坪谷 尚季

(三重大学医学部 医学科)

堀 浩樹, 駒田 美弘

(同 小児科)

小児癌患児への病名告知は、近年、増加傾向にあると思われる。我々の施設では、これまで小児癌患者に対する病名告知に関する調査研究を継続して行っており、1998年および2008年に健康小児とその保護者を対象に病名告知に対する意識調査を実施した。対象は、小学校4年生から中学3年生の児童生徒およびその保護者で、1998年調査では、児童生徒548名、保護者548名、2008年調査では、児童生徒436名、保護者441名から回答を得た。児童生徒への「癌になったら病名を知らせて欲しいか」という質問には、1998年は71.8%(385/536)、2008年度は74.5%(324/435)の児童生徒が「知りたい」と回答していた。一方、保護者への「子どもが癌になったら、病名を伝えるか」という質問には、1998年は33.0%(169/512)、2008年度は37.9%(167/441)の保護者が「伝える」と回答していた。